

# くものいと

第 3 号  
18-XI-1984  
関西クモ研究会

## クロヤチグモの卵のう

山本一幸

クロヤチグモ (*Coelotes exitialis*) の分類・分布については多数の報告 (八木沼, 1973, 西川, 1974, 1975) がなされているものの、生態について書かれたものは見当たらない。

今から6年前 (1978年) に飼育中のクロヤチグモが偶然にも産卵してくれた。残念ながら曖昧な記録しか残っていないので詳しく知ることができないが、今後の研究に何らかの役に立てばと思い報告する。

飼育は容量 500ml の広口ビンの中に、二又になった枝と落葉を入れ、約1日1回の割合でガなどの昆虫を与え、適度に水分を与えて行なわれた。

[記録からの抜粋]

5月12日：ビン内部に張り巡らしていた網の一部が取り払われ、落葉などをかがってドーム状の空間が作られている。

5月15日：ドーム (産室) の天井から、白色をした、直径2cmあまりの、やや楕円球状の卵のうを釣り下げていた。(図参考) 親グモは、その卵のうに下から抱え付くようにしている。

5月17日：親グモ、依然卵のうに抱え付いたままである。

6月11日：仔グモが出のうしているのを確認。体長、約3mm、数は明確でないが30頭あまりと思われる。親グモと共に、産室の内部全体に広がっている。

6月14日：ビンの口より仔グモが出て来る。

その後、仔グモがバルーニングによる分散をしたかどうか記録にないが、そのまま徘徊して、いなくなったように記憶している。

以上、観察記録を総合すると、まず同じタナグモ科であるクサグモが作るような産室を作ること、卵のうは親グモが保護し、産卵から出のうまでの日数は約25日であること、まどいの期間も産室で親グモと過すこと、などである。

クロヤチグモに限らず、ヤチグモ属全体について言えることであるが、その特有の生活環境が人間の観察の上で条件の良いものでないためか、生態についてはあまり調べられていない。しかし現在の分類の上での多くの問題を解くカギは、これらの生態を観察することで得られると思われる。

ここに記した報告は極めておそまつなものであるが、いずれじっくりと調べてみたいと思う。

〔文献〕

西川喜朗, 1974. 日本産ヤチグモ属 (Coelotes) 総説. 追大文紀, (8) : 174-182.

———, 1975. ヤチグモ (*Coelotes exitialis*) の分布と変異について (予報). 追大文紀, (9) : 175-187.

八木沼健夫, 1973. ヤチグモとホラズミヤチグモの雄. *Atypus*, (61) : 25-26.



Fig.1 *Coelotes exitialis* and her egg sac.

▷アメリカでクモのミステリー◁

前号で清水裕行氏が毒性クモについて記され、その中にドクイトグモを取上げておられた。最近このドクイトグモの記事がサンフランシスコクロニクル(1983.10.11)に掲載されたので、概要をお知らせする。

北カリフォルニア在住の Victor Mouser氏(55才)が10月6日に仕事中にクモにかまれ、10月9日に死亡したというのである。当時かんだクモは患者の話などから、アメリカで毒のあるクモとして有名なドクイトグモ(パイオリングモ) *Loxosceles reclusa*と推定された。

ところがここに二つの疑問点があるとして科学者の間で問題になっている。一つはこのクモに毒性はあるが、激しい症状をあらわし、かつ死亡することはないというのである。いま一つは、この人がかまれた北カリフォルニアにはこのクモが分布していないことである。クモ学者である S. C. William 博士はドクイトグモの刺によることを疑っている。

これについてある学者は、まず患者はアレルギー-特異体質であつたらうこと、またこの症状から判断してどうもドクイトグモとは考えられないし、分布の上からも納得できない、おそらくクロイトグモ *Loxosceles laeta* が最近南カリフォルニア(南米のクモとされていた)で発見されており、これが北上したとも考えられるという。いずれにしても今のところなぞである。そこで毒害管理センターでは、もしクモにかまれたら、できればクモを捕えて持参して救急所に来られたいと呼びかけている。(サンフランシスコ大学 八木沼和夫より)

▷中国でキムラグモの新種◁

中国では次つぎとキムラグモの新種発表があるが、83年4月また新しいキムラグモが発表された。王家福・叶河清両氏の研究で *Heptathela yuelushanensis* と命名された。産地は湖南省長沙岳麓山である。1980年4月24日採。(動雑, 1983, 8(2): 146-148)

# 京都北山（特に芦生地方）のクモ及び シナノアシナガグモの採集記録

加村隆英

京都北山とは京都市街の北に広がり、福井県にまで及ぶ山域をさすが、その北部にある芦生地方は今なお豊かな自然が残されている地域である。私は1979年以来、京都北山の各地でクモ類を採集してきたが、主に芦生地方で得られたクモ類の同定結果をここに示したいと思う。

また、長野県に多産するといわれるにもかかわらず、未だ他の地方では採集記録がないと思われるアシナガグモ科のシナノアシナガグモが京都北山（滋賀県の一部も含む）において、数回採集されているので、その記録を示す。なお、本種の採集に協力していただいた友人の木下育美氏、京都府立大学農学部応用昆虫学研究室の池尻周二氏、本種の標本の一部を同定していただいた九州大学農学部昆虫学教室の大熊千代子先生にお礼申し上げる。

## 1. 芦生地方のクモ類目録

芦生地方といっても漠然としているが、ここに示すのは、東経 135°42'~46'、北緯 35°16'~20' に含まれる地域において、1979年から1984年までの計11回の採集において得られたクモ類である。採集時期は5月（7回）、8月（1回）、10~11月（3回）である。

ウズグモ科      ウズグモ

ヒメグモ科      オオヒメグモ、アシプトヒメグモ、オナガグモ、フタオイソウロウグモ、ヤリグモ、カニミジグモ、ヒシガタグモ、ハラナガヒシガタグモ、ツクネグモ、バラギヒメグモ、ヒメグモ、ムナボシヒメグモ、タカユヒメグモ

サラグモ科      デーニッツサラグモ、ヘリジロサラグモ、クスミサラグモ、ツリサラグモ、ムネグロサラグモ、アシナガサラグモ、ユノハマサラグモ、ヨツボシサラグモ

センショウグモ科      センショウグモ

コガネグモ科      オニグモ、ムツボシオニグモ、ヌサオニグモ、アオオニグモ、トガリオニグモ、カラオニグモ、ハラビロミドリオニグモ、ヤミイロオニグモ、ヤマシロオニグモ、ズグロオニグモ、カラフトオニグモ、サガオニグモ、ヤマトカナエグモ、

ギンメッキゴミグモ、キジロゴミグモ、ゴミグモ、ヨツデゴミグモ、トリノフンダ  
ダマシ、メガネドヨウグモ、ジョロウグモ

カラカラグモ科 ヤマジグモ

アシナガグモ科 オオシロカネグモ、アシナガグモ、ウロコアシナガグモ、シナノア  
シナガグモ

ヒラタグモ科 ヒラタグモ

タナグモ科 ホラズミヤチグモ、ウスイスヤチグモ、クロヤチグモ、カメンヤチグモ、  
カミガタヤチグモ、ヒメシモフリヤチグモ

キシダグモ科 スジアカハシリグモ、イオウイロハシリグモ、アズマキシダグモ

コモリグモ科 ウズキコモリグモ、ハリゲコモリグモ

カニグモ科 コハナグモ、ハナグモ、ワカバグモ、キンイロエビグモ、キエビグモ、  
アサヒエビグモ、アマギエビスグモ、シャコグモ、トラフカニグモ、ヤミイロカニ  
グモ

ハエトリグモ科 ヤマジハエトリ、ムツバハエトリ、ネコハエトリ、マミジロハエト  
リ、デーニツツハエトリ、マガネアサヒハエトリ、オオハエトリ、アリグモ、ウス  
スジハエトリ

フクログモ科 ヤハズフクログモ、コムラウラシマグモ、ネコグモ

イズツグモ科 イズツグモ

アシダカグモ科 コアシダカグモ

シボグモ科 シボグモ

以上17科85種の目録を示したが、コサラグモ科、コモリグモ科、ワシグモ科などは調  
査不足であるので、今後、より正確なファウナを明らかにしていきたい。

## 2. 京都北山におけるシナノアシナガグモ *Tetragnatha shinanoensis* Okuma et Chi- kuni, 1978 の採集記録

- 1) 京都府北桑田郡美山町芦生須後 (Matsumoto's Locality Code : C3543-3518)、  
標高約 400m、24-V-1980、2♀、加村採；1♂、木下育美採。
- 2) 京都府北桑田郡美山町芦生灰野付近 (C3543-3518 ~3543-3517 ~3544-3517)、  
標高約 400m、25-V-1980、2♀、加村採。
- 3) 京都市左京区大原大見町 (C3548-3511)、標高約 620m、8-V-1982、2 exs.、

加村採。

4) 京都市左京区小出石町の北方のミ谷 (C3550-3509)、標高約 350~500 m、9-V-1984、3 exs.、池尻周二採。

5) 滋賀県大津市平の南方 (C3551-3511)、標高約 480m、9-V-1984、3 exs.、加村採。

6) 京都市左京区貴船 (C3546-3507)、標高約 400m、30-V-1984、1 ♀ 1 ♂、加村採。

京都北山にはスギの植林が多いが、本種はスギの枝のピーティングによって、イズツグモやクミスアラグモなどと共に採集されることが多い。長野県からかなり離れた京都で採集されたことから、本種は他の地方にも分布している可能性が高いと思われる。

〔文献〕

大熊・千国、1978. 長野県産アシナガグモの1新種. Acta arachnol., XXVII: 1-7.

## 〈新刊紹介〉

### 1. 学研の観察図鑑2 『昆虫2・クモ』

友国雅章監修、学習研究社発行。6月20日初版発行。650円。クモの部は植村利夫前杏林大学教授。一般の人が野外観察をする際の手引になるように生息場所ごとに一般的な種を紹介している。“昆虫とクモ”と題してあるが、クモは4ページ、多足類が1ページだけなのは残念である。扱っている種：(クモ) オオヒメグモ、コガネグモ、ジョロウグモ、ゴミグモ、ヤマシロオニグモ、オニグモ、ヒラタグモ、クサグモ、アシナガグモ、オナガグモ、マミジロハエトリ、ネコハエトリ、カバキコマチグモ、アシダカグモ、ハナグモ、ウズキコモリグモ、キシノウエトタテグモ、イオウイロハシリグモ、ササグモ、ジグモ、アリグモ、ワカバグモ(多足類) オオゲジ、イッサムカデ、アオズムカデ、アカムカデ、トビズムカデ、フジヤスデ、マクラギヤスデ、タマヤスデ。

### 2. フィールド図鑑 『クモ』

新海栄一・高野伸二解説・写真、東海大学出版会発行。8月5日初版発行。2000円。美しい生態写真を豊富に使った観察・採集の手引にもなる楽しい図鑑である。扱われたクモは366種。普通種はほとんど網羅してある。イトグモ科・ヨツブグモ科・ヨリメグモ科 (Anapidae) ・ナミハグモ科・エビグモ科・ウエムラグモ科・ミヤマシボグモ科を用い、コサラグモ科をサラグモ科に統合しているのが目新しい。

中国におけるタイリクヒラタグモの分布

清水裕行

文在根・朱伝典 (1980) は *Uroctea lesserti* の雄の触肢の図を初めて報告した。これを、先に白甲鏞 (1978) の発表した *U. limbata* のものと比較すると両者が同じものであるという確信が更に強まった。八木沼健夫 (1963) や筆者 (1978) が既に述べたように西アジア・北アフリカから報告された *limbata* とタイリクヒラタグモとは様々な点で大きな相違があり、ヒラタグモ類の雌雄生殖器を検討した Baum は、*limbata* と *lesserti* を別々の species group に含めているくらいである。タイリクヒラタグモの正体は

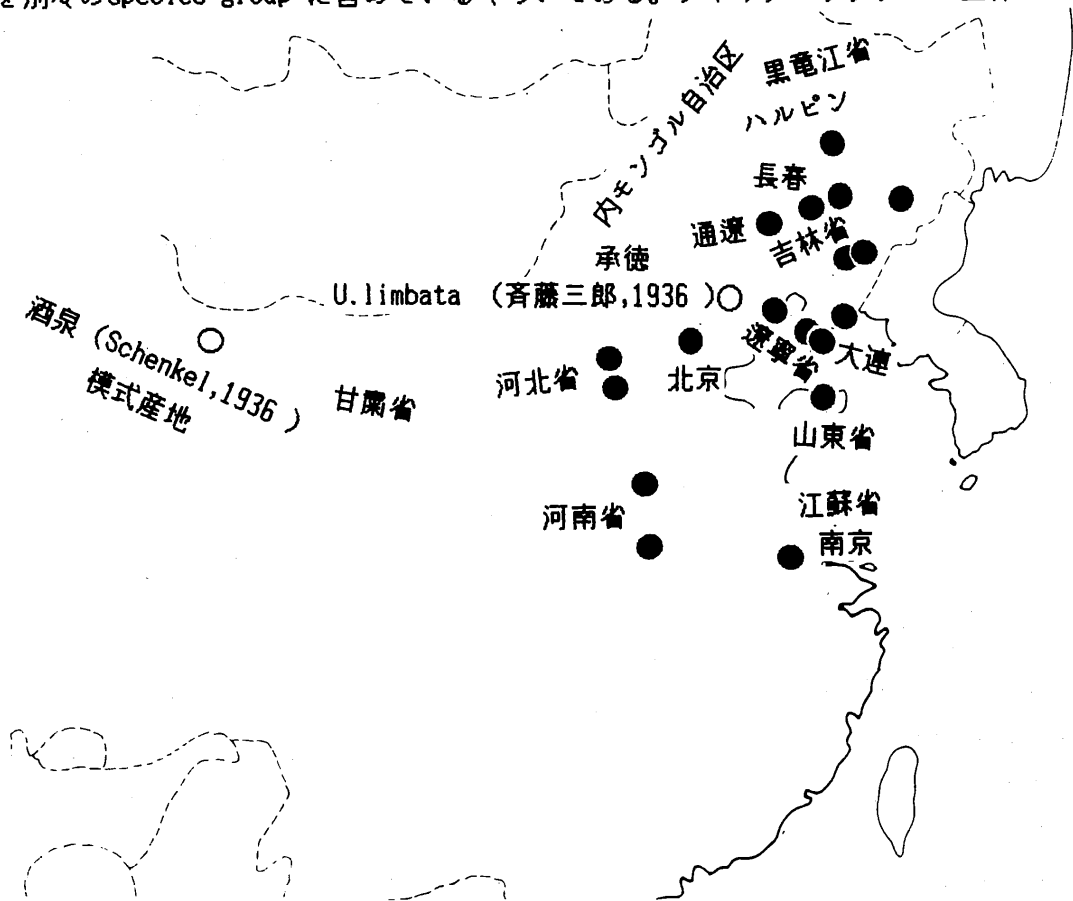


Fig.1 中国におけるタイリクヒラタグモの分布 (文・朱の報告をもとに筆者作図)  
○-既知産地、●-今回確認された産地

lessertiであると断定してもよい時期になったのではないだろうか。文と朱は同論文で従来の主として外来者による記録に加えて、6省16個所に及ぶ新産地を発表しており、これによって本種の分布がより鮮明になった。(地図参照)

更に興味深いことは Simon (1880) による北京産の *compactilis* と 齊藤三郎 (1936) の *limbata* を共に *lesserti* としていることである。両氏の判断が正しいということになれば、Simon はタイリクヒラタグモの標本を実見しておりながら、それを *limbata* とは判断しなかったことになる。ヨーロッパにおいて、*limbata* の報告はヒラタグモ類では *durandi* に次いで多い。これは西アジア産であることからみて当然である。Simon 自身も本種の雄の図を発表している (1893)。もしタイリクヒラタグモが *limbata* であれば、Simon は本物の *limbata* を *compactilis* とし、後の研究者も誰一人これに気付かず西アジア産の別種を *limbata* として発表してきたことになり、極めて不自然である。タイリクヒラタグモが *limbata* でないことの傍証になるのではないだろうか。

#### 〔科学雑誌に載ったクモ〕

##### ●ミニタランチュラ (「QUARK」第2巻第10号7頁; 1983,10,1)

パナマで体長約 0.8ミリのクモが発見されたが、N. プラトニック博士によると全体の姿や上アゴ、キバの形態がオオツチグモによく似ているということである。このクモの特徴は2眼で、肺をもたず“皮膚呼吸”していることである。P博士の正式発表が楽しみである。

##### ●クモの防衛システム (「QUARK」第2巻第11号14頁; 1983,11,1)

米コーネル大学のアイズナー・カマジン両氏によると、クモは痛みを感じさせる有毒物質に反応して足を自切するという。

##### ●ヤスデの自己防衛 (「QUARK」第3巻第6号10頁; 1984,6,1)

ヤスデが敵に襲われると、いやなにおいのする液を出して身をまもることはよく知られているが、ミズリー大学の2人の生物学者はこれが麻酔剤であることをつきとめた。ここではヤスデを襲ったクモがひっくりかえっている様子を写真で紹介しているが、ヤスデはタマヤスデ類、クモはコモリグモの雄のようである。クモがヤスデの分泌液をきらう様子は確か、映画『砂漠は生きている』でも紹介されていたが、好んでヤスデを餌にするクモ (例、ヒラタグモ) もあるので、ヤスデの種類とクモの種類との間に“相性”のようなものがあるのかもしれない。(S)



## クモの習性断片

清水裕行

### (1) ジョロウグモの網を乗っ取ったアシナガグモ

1983年9月4日、自宅近くの西宮市角石町の道端でジョロウグモの網の中央に占座しているアシナガグモ (*Tetragnatha praedonia*) の雄を目撃した。宿主のジョロウグモは、雌が網の上方の、雄が下方のそれぞれ枠糸で網中央を窺っている様子で、追い払おうとする気配はなかった。雄はこの時期に出現するものとしては普通の大きさで、雌は比較的小柄であったが、いずれもアシナガグモより大きかった。雌が網の中央にいるのをアシナガグモが追い出したのか、雌雄が見合いをしているすきに入り込んだのかはわからないが、アシナガグモの上顎にかみつかれたようなきずがあるので、侵入した時にもみあったのかもしれない。ハムシを網につけてみると、器用に網を伝ってハムシを攻撃しかけたが、大き過ぎたのか、すぐに中止して中央に戻った。こうしてみると、乗っ取った網を使いこなすことはできそうである。

なお、同日、同市内苦楽園でジョロウグモの側網に合計12頭のアシナガグモがたむろしているのを目撃した。そのうちの1頭を採集したところ、やはり *T. praedonia* の雌であった。アシナガグモの若い個体がジョロウグモの網に居候しているのはよくみかけるが、成体がこれだけいたのは珍しい。

### (2) オオヒメグモに捕えられたキノボリトタテグモ

オオヒメグモは地上を歩く小動物を糸で吊りあげて捕える習性があるので、徘徊性のクモもよく餌食になっている。アシナガグモでさえも捕えられた例がある。筆者は1983年9月23日、苦楽園の雑木林でキノボリトタテグモの雄が網に吊されているのを見つけた。やや乾燥していたが、ほぼ完全な状態の成体だった。雄は繁殖期になると盛んに歩きまわるので、このクモも雌を求めて移動中だったのだろうか。もっとも、これまで筆者が採集した原蛛類のほとんどが雌を含めて、道端で“拾った”かたちであるので、原蛛類も結構、移動しているようで、一概に繁殖期と結びつけるのは危険である。

#### “拾った”原蛛類のデータ

- キシノウエトタテグモ：神戸市東灘区路上、1979-4-24、♀；西宮市苦楽園コンクリート塀側面、1980-10-9、♀（その家の庭が工事中だったので避難したのかもしれない）
- キノボリトタテグモ：三重県員弁郡藤原町岩膚、1975-4-24、♂。
- ジグモ：西宮市内側溝中、♂（台風の翌日）

## 研究会蔵書 (1)

各地の研究者・同好会から寄贈していただいた図書を保管してあります。会員の皆さんのお役にたてられるようにしたいと思いますので、貸出を御希望の方は御連絡ください。

(保管番号0001) しのびぐも、第8号、三重クモ談話会発行。

(0002) 同上、第9号。

(0003) 同上、第10号。

※以上は'83年春に三重クモ談話会より寄贈を受けたものです。

(0004) 胡運瑾、我国常見的凡種猫蛛。湖南師院学報自然科学版1980年第1期、pp.67-75。

(0005) 尹長民・王家福、中国馬蛛属(狼蛛科)三新種。同上1980年第2期、pp.55-60。

(0006) 王洪全・周家友、擬環紋狼蛛相互殘食試験的初步觀察。同上1981第2期、pp.45-50。

(0007) 胡運瑾・宋大祥、我国数種管巢蛛記述。同上1982年第2期、pp.55-62。

(0008) 胡運瑾・王惠珍、新疆綿田三種微小蛛的描述。同上1982年第2期、pp.63-66。

(0009) 白求恩医科大学学報蜘蛛学專 (1983)。

(0010) 王洪全(1983)、保護利用蜘蛛防治水稻害虫的研究。植物保護学報、Vol.10、No.4、pp.225-230。

(0011) 廖崇恩・陳茂乾・宋大祥(1984)、大絡新婦的形態特徴与生物学。動物学報、Vol.30、No.1、pp.67-71。

※4~11は本年5月の八木沼健夫氏の訪中の際に各著者から本会へと託されたものです。本会からは本誌1~2号を寄贈しました。(大分アンバランスですが)

\*\*\*\*\* 原稿をお待ちしています \*\*\*\*\*

こんな“小論文”を歓迎します。

- (1) 採集記録：種類数は少なくても、限定された地域・時期・環境のものは貴重です。
- (2) 観察記録：一見ありきたりの習性が案外知られていないものです。
- (3) 文献紹介：ローカルな雑誌、外国の記事でも参考になるもの等。
- (4) “私の方法”：ユニークな採集・観察の方法、文献の整理法、道具等を紹介して下さい。

## 〔編集部より〕

お約束の期限をはるかに超過して、ようやく『くものいと』第3号をお届けします。日頃応援を戴いている会員の皆様、御迷惑をおかけしました。特に、はやばやと原稿をお送り下さった会員の方々には申し訳ないことをいたしました。ともあれ、より充実した内容の会誌を発行できてホッとしております。更に良いものにしていくために、御批評・御助言下さると共に、次号の原稿の準備もお願いいたします。前頁に挙げたほかにも、クモに関するものならば何でも結構です。ユニークな内容のものを期待します。

従来のように幹事が一人で何もかもやっていたのでは、技術的にも限界がありますし、とかく独善に走ってしまい本当に良い運営はできないと思います。幹事も自分だけで動けばととりばやいので、つい勝手に行動してしまいましたが、そろそろ反省する時期にきました。既に、編集の作業を分担しようというお申し出もあり、共同で運用していく方向に軌道修正したいと思います。編集・会費・事業等、有益な御意見をお待ちしております。(清水裕行)

---

## 『くものいと』第1～3号目次

〔第1号〕1982年8月20日発行

ヤマトホラヒメグモ ( <i>Nesticus yamato</i> Yaginuma) の新しい分布地	
野戸章・西川喜朗	1
北摂山地 中山のクモ	清水裕行
	2
近畿クモ情報、小学生兄妹がカトウツケオグモ採集	2
秋季観察会のお知らせ	2
細蟹舎通信〔4〕ムツバハエトリの学名について・東洋のユカタヤマシログモは <i>Scytodes thoracica</i> か?レヘティネン博士の疑問・二人の中国くも学者研究のため来阪	
八木沼健夫	3
関西クモ研究会会務報告	4

〔第2号〕1983年7月20日発行

蜘蛛の系の物性	大崎茂芳
	1
細蟹舎通信〔5〕中国の蜘蛛学者の会・アメリカのホラヒメグモ日本で	
八木沼健夫	3

ヒラタグモ雑話 (1) 種名にみるお国振り	清水裕行	4
吉野山のクモ	加村隆英・清水裕行	5
マスコミ		6
1983年度例会・秋の観察会		7
会務報告		8

(第2号正誤表)

頁	行	誤	正
6	5	アラバマ	アリゾナ
	8	アラバマ	アリゾナ
8	13	須賀瑛文	(削除)

[第3号]

クロヤチグモの卵のう	山本一幸	1
細蟹舎通信 [6] アメリカでクモのミステリー・中国でキムラグモの新種	八木沼健夫	3
京都北山 (特に芦生地方) のクモ及びシナノアシナガグモの採集記録	加村隆英	4
新刊紹介		6
ヒラタグモ雑話 (2) 中国におけるタイリクヒラタグモの分布	清水裕行	7
科学雑誌で扱われたクモ、ミニタランチュラ・クモの防衛システム・ヤスデの自己防衛		8
クモの習性断片、ジョロウグモの網を乗っ取ったアシナガグモ・オオヒメグモに捕えられたキノボリトタテグモ	清水裕行	9
研究会蔵書 (1)		10
原稿をお待ちしています		10
編集部より		11